

# 真宗僧伽の本質と歴史 (一)

長 峯 崇 仁

## 目 次

はしがき

第一章 浄土真宗の伝統

第一節 聖徳太子と親鸞聖人

第二節 法然上人と親鸞聖人

第二章 經典に於ける僧伽観

第一節 親鸞聖人と三経

第二節 大無量寿経の僧伽観(以上本号)

第三節 三國七祖の僧伽観

第三章 真宗の僧伽

第一節 親鸞とその原始僧伽

第二節 蓮如上人の僧伽大成

第三節 封建時代の僧伽

第四章 真宗僧伽の現実と将来

第一節 僧伽の現実

第二節 真宗僧伽の将来

附 主なる引用書目

はしがき

時は移り世は変り、既に七百年の星霜を隔てながら、今も尚、未代の求道者の良い路伴である親鸞聖人は、厳密な意味では、今日の世界の此の峻峻な現実を取つてこそ、愈々大切な相談相手であり、最も優れた救済者であると思う。日本と唐天竺だけだった世界が、洋の東西南北に拡がり、文明も文化も同居し交錯し、生活様式も精神も、相交つて、我々の現代には己

に、七百年前の面影は残つて居ない様であるが、尚何処かに蔽として祖国の香の存するのは、唯、文化の深さである。民族の心情の奥底にだけ、借り衣でもなければ、人真似でもないものが端然として未だ生きて居る。自然科学の発達と人文科学の著しい進歩に伴つて、人間の神経が錯乱の度を増せば増すほど、我々に遺された精神の世界史的使命の愈々重く大きいことを思う。右と左の抗争が、原子兵器を携えて、全世界の不安を刻々に深めて行く風雲を、必らず能く転じて平和世界の莊嚴に任ずるものは、実に此の実践的自覚以外の何者でもない。その無比の豊醇な深さこそ、日本人我々の唯一の法宝である。今や唯民族に私すべき秋ではない。

然るに、現代の先達を以つて自他共に任ずる知識人が応々にして、「自分は親鸞を敬慕するの念に於いて、決して人後におちないけれども、進んで真宗の門徒にならうと思はない」と公言する。その反対に寺院宗門に満悦して居る側からは、「そんなことは中心のはづれた話で、我一人が真実の信心をいたゞけば、世界中が真宗の門徒だ」と逆襲する声をきく。が斯く発言する心情そのものは、果して親鸞聖人を敬慕する人の真実の心行を離れて、遠くから傍觀者の座を共に誇つて居ないであらうか。「聖道の諸教は行証久しく廢れ、浄土の真宗は証道今盛なり。然るに諸寺の釈門、教に昏くして、真假の門戸を知らず、洛都の儒林、行に迷うて、邪正の道路を弁うることなし」と大悲し給うた祖聖が、七百年後の今現に在せば、如何にお感じになることであらうか。

祖聖の聖紀七百年を今こゝに迎えた最大の意義は、正しく万人の助かる念仏の僧伽の確立にある。現に親鸞を知り親鸞の跡を憂うる人々の関心は、一つに係つて真宗の教團の現実に在ることは、瞭々たる事実である。現にその教團の一隅に生を享け遇い難い法に值うことを得て、生涯を祖徳に托する身の、常に実感する所は、内、昔日の南都北嶺に異らず、外も亦ありし日の洛都の儒林に何の変るところもない悲である。愚弟五十年の不孝な遍歴を貫いて、常にわが路程を選ばしめたものは、唯一つ、僧伽の課題に外ならぬ。迂屈性粗で何事も成るなき身の懺悔の底にも、唯祖恩を訪うの心ばかりが残つて居る。こゝに骨筆を驅り血涙に未練を画いて、皮紙を人の笑にまかせ、唯、世の万人と共に、親鸞のもとに帰らんと念ずる。

現代ムードの破壊力を前にして、真に十方衆生を護る僧伽は確立出来ないものであらうか。

わが宗門が七百年御遠忌を迎える心構えを遺弟に問う思召から、広く記念論文を募らるゝと聞き、御深慮に応えたい思から此の稿を草した。先輩道友の御叱正を蒙り度い。

## 第一章 浄土真宗の伝統

### 第一節 聖徳太子と親鸞聖人

建仁元年（一一〇一）親鸞聖人は廿九歳の御時、山を下りて六角堂に参籠し、聖徳太子の冥導を祈られた。九十五日の暁、太子の夢告を蒙つて、吉水の法然上人に会い参らせて、百日の間、降るにも照るにも、禪坊に訪ね参り給うて、生死の迷を出離する道を唯一筋に聴聞なさつたと、恵信尼の消息は伝える。当時の社会に太子信仰が盛であつたと云うが、人世行路に迷惑を感じ、時勢の絶壁に直面すれば、その通路を太子の智炬に仰いだのは、既に当時、六百年來の日本人の智慧の伝統である。骨肉相喰む権閥争覇の怒濤に身を浮べた太子が、安住の処を仏道に求め、自ら法華、勝鬘、維摩等に大乘を探り、憲法を作つて、「篤く三宝を敬え、三宝とは仏法僧是なり。則ち四生の終帰、万国の極宗なり。何れの世、何れの人か、是の法を貰はざる。人尤だ悲しきもの鮮し、能く教うるをもて従う。それ三宝に帰りまつらば、何を以てか枉れるを直くせん。」と、困の礎を帰依三宝に定められたその精神は、生死の惑を出でんとする後世の日本人の魂をよぶものがあつた。殊に在家の万人の仏道を行ぜられた太子の徳は、山を下つた祖聖に深く通ずるものがあつたに違ない。これに由つて法然の開いた独立浄土門に入りそこに受け継いだ流が、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源空と伝えた三經一論に収まる「本願を信じ念仏して仏に成る」真実の心行の仏道であつた。

祖聖が六角堂に参籠して引導を祈られたのは、世の所謂神秘信仰ではない。過去二十年の歲月を、比叡の旧教権の環境の中

で、しかも唯の人間一人の内徳行修を経て醇熟した教養そのものゝ悲痛が、太子の点火を求めて、自ら発火した求道の始動である。こゝに閉ざされた城廓の門を出でて、自由な眞の仏弟子の僧伽を、太子と共に選ばれたことを意味する所以がある。

指導精神と教権とを私して、法域を閉ざす邪道も何時の世にもあつた。太子を亡きものにせんとする守屋の血も、放逸を謳歌する粗暴の続く限り絶滅はしないけれども、「何れの国、何れの人か、是の法を貴ばざる」と宣揚された法を、眞の心行の帰依の座に明らかにした祖聖親鸞に至つて、和の国の礎ははじめて明瞭になつた。これこそ、日本の眞の独立の座であると共に、眞の平和世界の共同の礎でなければならぬ。

祖聖は罪業深重に悲痛する十方衆生の帰すべき僧伽を開顕された。だからこそ、常隨の弟子の夢にすらも、太子が却つて六百年後の親鸞を、「敬礼大慈阿弥陀仏、為妙教流通、來生者、五濁惡時惡世界中、決定即得無上覺也」と恭敬し証誠せられるのを感じられた。太子若し在せば、祖聖を称讚すること、必らずやこの夢の如くであろう。

今も聖道門の行軌を守るであろう出家の仏弟子も、僅かばかりの例外はあるであろうが、ほとんど誰もが妻を持ち、子を養ひ、魚鳥獸肉を喰うのを当然の如く思つて居るけれども、七百年前の親鸞が、在家生活の仏道を選ぶには、絶大な決意と教証の保証がなければならなかつた。建仁三年（一一〇三）三十一歳の御時の六角堂の夢告がそれを示す。

行者宿報設女犯

我成三玉女一身被レ犯

一生之間能ヲ莊嚴

臨終ニ引導ニ生ニ極樂ニ

との太子の声なき声を聴かれた。誠に謙恭な真摯な三十一歳の親鸞が眼前に浮かぶではないか。深く耕された人なればこそ、自然的生存に自由を主張することなく、進んで、宿報と感受したのである。また、聖人の写された磯長の太子廟の偈の現存するものは、正嘉元年（一二五七）五月二十八日八十五歳の御筆であるが、五十五年前の夢告の文との間に見逃がすことの出来

ない一と筋の糸を引いて居る。太子御自撰と伝説されるこの廟窟偈は、

大慈大悲、本誓願 愍念衆生一如二子一

是故方便從西方一 誕生片州興正法一

我身救世觀世音 定慧契女大勢至

生育我身一大悲、母 西方教主弥陀尊

真如真実本一体 一体現三同一身

片域、化緣亦已尽 還歸西方我淨土

為度末世諸有情 父母所生血肉身

遺留勝地此廟窟 三骨一廟三尊位

過去七仏法輪、処 大乘相応功德地

一度參詣離惡趣 決定往生極樂國

と記されて居る。太子薨去の後、真実帰依を太子に冀ぐ淨土願生者の作る所にかゝると考えられるけれども、現生の宿縁の上に生育の弥陀の悲身を仰ぎ、今生の路伴の上に淨土の同行を恭敬したであらう太子の御心情を伝えて充分である。

三十一歳の親鸞の教養と体感とは、唯将来の生活設計や感傷的な悲喜に立つものではなく、宿業の身の実感に立脚して居ると見るのはあやまりであらうか。設女犯を時間的に未来の仮定だと解読しなければならぬ理由は何もない。大經の本願の文の設の語にしても、單なる未来の仮定ではない。超時間的な矛盾の自己同一の保証をそれは意味して居る。宿業の現実の底に徹する大悲の体感に、真実の仏道を体解した僧伽の革新がこゝに発芽して居る。万人が世俗のまゝで、悪趣を出で、願生淨土の真人生に生きる太子から親鸞えの伝承の優れた精神がこゝにあるのである。

## 第二節 法然上人と親鸞聖人

親鸞聖人が古水に法然上人を訪ねたのは、建仁元年（一一二〇）二十九歳の御時で、師の上入は六十九歳、承安五年（一一七五）四十三歳で山を下り浄土宗を開かれてから二十六年を経て居る。黒谷の報恩藏にあつて、善導の観無量壽経疏の中に「一心専念弥陀名号：是名正定業、順彼仏願故」の文に邂逅し、称名得生の一門に落居し、それ以来己に三十年に近い歳月を、洛東にひたすら念仏弘通にその生涯を捧げて居られた。時恰も平氏の衰滅、源氏興起の秋に当り、都もさながら修羅の巷と化し、庶民は安んずる所を知らず、上も下も戰々兢兢として塗炭の苦に沈み、鐘声に諸行無常を聴き、花に盛者必衰の色を觀じた頃であるから、往生浄土の易行に帰する人々は、道俗を問はず、貴賤を分たず、その教を知らぬありさまであつた。先に吉水の薰風に慕い集う幾多の先輩に比すれば、まるで孫弟子とも見える程の親鸞聖人であつたであらう。師弟の日常の事に就いては、今知る術もないが、かの山の抗難を和げるために古水から提出された「七ヶ条制戒」に僧紳空の自署を列らねて居る事実に、祖聖がその著述の中に、只に奉事敬重感恩の情を述べて居られることに由つて、至純無雜に法を縁としての結び着きの如何に深い間柄であつたかを知ることが出来る。祖聖の名著「願浄土真実教行証文類」（以下略して御本書と称する）の後序に、「興福寺の学徒、承元丁卯歲（一一二〇）：奏達す。：茲に因りて真宗興隆の太祖源空法師並に門徒数輩、罪科を考えず狠しく死罪に坐し、或は僧の儀を改めて姓名を賜い遠流に処す。予は其の一りなり」云々、とあると、「愚禿釈の鸞、建仁辛酉の膺、雜行を棄て、本願に歸し、元久乙丑歲（一一二〇五）（聖人三十三歳）、恩怨を蒙りて選択を著く。同じき年の初夏中旬第四日、『選択本願念仏集』の内題の字、並びに『南無阿彌陀仏往生之業念仏為本』と『釈紳空』の字と、空の真筆を以つて之を書か令めたまいき。同じき日、空の真影申し預り、圖画し奉る。同じき二年閏七月下旬第九日、真影の銘は真筆を以つて、『南無阿彌陀仏』と『若我成仏 十方衆生 称我名号 下至十声 若不生者 不取正覺 彼仏今現在成仏 当知本誓重願不虛 衆生称念必得往生』の真文を書かしめかまう。又夢の告に依つて、紳空の字を改めて、同じき日、御筆を以つて名之字を書かしめたまひ畢んぬ。本師聖人今年七旬三の御歳なり。」と師恩の深厚を懐うの情を述べられるを見て、その間の実

情を窺うことが出来る。行卷末の正信傳には、「本師源空明フカニシテニ 仏教ニ 憐シヤク惡凡夫人ノ 眞宗教証ノ興シ片州ニ 選ノ撰ノ本願ヲ弘ク惡世ニと讚し、和讃には二十首を以つて、「本師源空世に出で、弘願の一乘ひろめつゝ、日本一州ごとごとく、浄土の機縁あらわれぬ。」「善導源信すゝむとも、本師源空ひろめずば、片州濁世のともがらは、いかでか眞宗をさとらまし。」「曠劫多生のあいだにも、出離トウリの強縁トウしらざりき、本師源空いまさすば、このたびむなしくすぎなまし。」と隨順の至情を述べられた。

北越の配所から関東処々の行化の年月を、常に祖聖の傍にかしづかれた恵信尼の思出を伝える消息には、「ひたちのしもつま：さかいのがうと申すところに候いしとき」の夢に就いてのお二人の間の物語が記されてある。恵信尼の夢の中で「光ばかりのお像が法然上人のお像だ」と説明されたとお聴きになつた祖聖は、「師の上人を勢至菩薩と世にも申して居ることであるから、それはまさ夢よな」と妻恵信に語られたと、恵信尼は娘の覚信尼に夫ありし日の思い出を書き送つて居る。「源空勢至と示現し、あるいは弥陀と顯現す、上皇群臣尊敬し、京夷庶民欽迎す」と和讃せられたのも、この御心情の事実を記録するものであろう。

まことに、「愚の中の極愚」「愚痴の法然房」と自ら名乗るこの師のもとに、「唯よき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の子細なきなり」「たとい法然上人にすかされまゐらせて、念仏して地獄に墮ちたりとも、さらに後悔すべからず候」と、この師の「仰せ」に、「親鸞一人がために候いける」本願の招喚を聴く此の弟子であつた。

「善人も悪人も皆助かる」と聞いて、「罪惡も問題でない」と自らはからい、自ら弁護する信の概念、念仏の拙象が生ずるのは、師の言葉の中に生きた南無の招喚を聞かないからで、従つてそこに自力修善のもとを切りぬるものも生じたのであるうし、造惡無碍と云う虚無主義に陥つた詭弁論者も雜生したのである。また、外からは、畢竟依「南無」の招喚を知らぬ人々からは、それに対して不了仏智の「菩提心撥無」の論難も襲うて来たのであるう。誠に、本願の念仏は易行であるが聞き難く信じ難い。今も昔も同じである。心ある朝臣等の深憂も、教権の強訴をさえぎれずに、古水の新教団は解散しなければなら

なかつた。

だが、その結果は、此の万人の仏道は都から広く未開の辺地にひろまる好機となつた。「大師聖人源空流刑に処せられたまわずば、我亦配所に赴かんや。もしわれ配所に赴かずば、何によつてか辺鄙の群類を化せん。是なお師教の恩致なり」とは祖聖の配所の辛苦の中の御感概を伝える言葉である。「文字の心も知らず、あさましき愚痴きわまりなき」田舎の人々の実態に接して、曾つて耕されたことのない、よそおいもまた知らぬ頑迷で粗野な自然人の地体には、十方衆生の底を初めて発見せられたおれもいがあつたに違ない。罪が深いとか、あさましいとか、愧しいとかの言葉すらも通じない、仏とか凡夫とか話して見ても翻譯する言葉のない土地、満ち足りて喜び、窮していきり、勝つてほがらかに、負けて無底の獄苦に沈むばかりの未開発の地肌に触れて、はじめて、値遇し難くして値い、聞き難くして聞き得た仏道と我が身の宿縁に深く眼が開けたに相違ない。祖聖の念仏の中にたゞえられた自他を超越する温くして深く鋭い批判精神は、祖聖のこの奇しき体験をとおして宿縁の深遠を知らされた法眼に違ない。人類精神史上に於ける祖聖親鸞の偉業たる「他方廻向の心行」「浄土の大菩提心」の眞実性顕開の課題は、さだめし、北越辺境の人々と共に暮らされた最初二三年の間に、祖聖の全書をとらえて懐胎されたであろう。かくて、撰撰集に愈々心をひそめて撰撰集の底をたゞき、解脱明恵の聖道の疑問をも抱擁して、共に弥陀の本願に帰すべき、万人の眞実の証道を開闢したのだと思う。「五濁増のしるしには、この世の道俗ごとごとく、外儀は仏教のすがたにて、内心外道を帰敬せり」「この世の本寺本山のいみじき僧とまをすも法師とまをすもうきことなり」と記した御老後の御述懐の金剛の如き堅固さは、この無仏の辺境に野人と共にあつて、十方衆生の底に触れた祖聖の念仏であつて、都の塔像経卷の中にのみ居て、綺麗ごとくに明け暮れた人々のものではない。配所から都に帰つて、ふたゞび京におちついて終られた法然上人にも、「あとを一廟にしむれば、遺法あまねからず、予が遺蹟は諸州に遍満すべし。ゆえいかんとなれば、念仏の興行は愚老一期の勸化なり。されば念仏を修せんところは貴賤を論ぜず、海人漁人がとまやまでも、みなこれ遺蹟なるべし」との感慨がある。跡を一廟に占むれば不知不識の間に、借越と独善の疎外が生じて、私心の邪執が人を遠ざけることになる、遠く慮



つて誠めて居られる。

祖聖親鸞は念仏を身に承けて伝える道俗を註しながら「俗の二人は、一つには仏の御法を信じ行ずる人なり。二つには仏の御法を信じ行ずる女なり」と述べて、本願を信じ念仏する人みな念力に托して、僧侶と云う特殊の身分の人々の手に僧伽の閉ざされざらんことを願つて居ることがうかゞえる。遺憾は加茂川に捨てゝ魚に与えよとの御遺訓を忘れてはならない。

法然と親鸞と、師と弟子と、よく本願と十方衆生と、相照応し相映出して、仏道の伝統と機の開発とを余蘊なく開示し、無障無碍に展開してやまぬ僧伽の規模とその主権のありかたが、此の二人の上に明らかにされて居る。

## 第二章 經典に於ける僧伽観

### 第一節 親鸞聖人と三經

親鸞聖人の仏道の源は大無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經であつて、淨土真宗が之を正依の經として居ることは、世の知るところである。本願淨土の眞実之教大無量壽經は弥陀の本願の淨土と衆生往生の自覺的實踐の原理、即ち衆生救済の法を説き總經は淨土に往生する人間の種々の機根と、大經に説かれた實踐的原理に自覺するに到る過程、即ち方便の機から眞実の機の顕はれる発生的過程を暗示し、小經は前二經に代表されるとも見える法と機の眞実を受けて、教法の眞実を証誠し勸信する。御本書教の卷に、

「大無量壽經 眞実之教  
淨土真宗」

とその仏道の旗印を挙げられた。この事は祖聖が法然上人を通じて七祖を溯り、十方衆生を抱擁する眞実の証道の僧伽の源を、この經に発見したことの表明である。「凡小を哀み」「群萌をすくい」「功德の室」「眞実之刹」となる弥陀の本願が此の經の生命で、南無阿彌陀仏なる弥陀廻向の大功がその血であると領解せられたのである。その眞実である証拠として、法を

説く釈尊と聽聞する阿難との間に、説聽以前に、心と心とに相通じた仏の五徳現瑞の文と、その由来を語る「過去現在未來の仏と仏と相念する」の文を引き、師と弟子と、仏と衆生との間に、深奥に本來血のつながりがあり、その共感する場で説かれた十方衆生成仏の仏道であることを、上述の經文に依つて立証して居られる。こゝに吾々は、凡聖逆誘、貴賤智愚に通ずる万人の座にあつて、如来の悲智に通う至純な眞実歸依を説かしめる經家の南無の座と、祖聖の座と、全く同一の仏道であることを知らされる。

祖聖の觀無量壽經に就いての領解は、御本書方便化身土の卷の初頭に、

「邪定聚之機 双樹林下往生 無量壽仏觀經之意」と、至心發願之願と云う第十九願の名を挙げた脚下に註して居られる。そこに御自釈を誌して、「謹んで化身土を顯さば、仏は無量壽仏觀經の説の如し、眞身觀の仏是なり。土は觀經の淨土是なり。」然るに濁世の群萌、穢惡の含識、乃し九十五種の邪道を出で、半滿樞実の法門に入ると雖も、眞なるものは甚だ以つて難く、実なる者は甚だ以つて希なり。偽なる者は甚だ以つて多く、虚なる者は甚だ以つて滋し。是を以つて、釈迦牟尼仏福德藏を顯説して群生海を誘引し、阿弥陀如来、本、誓願を發して普く諸有海を化したまう。」と領解を述べる。その意は、諸々の邪道を捨て、仏道に入り、開法求道の新しい生活は始つても、その根底の心根に眼を注ぐならば、なかなか眞実なもの有り難く、虚仮のもののみ多いのが現実である。その現実の僧伽に入り來つた諸機を誘引し、教化開發する爲めに、定善(息慮澹心)と散善(斷惡修善)、福智二藏の修行を教え、漸次に大經所説の如来廻向の念仏へと導くのが觀經の本意であると、善導法然の觀經解説の眼を剔出す。大經の僧伽には 正定聚の機の環境背景として、觀經の諸機をも第十九願の機として抱擁して居ることを知らねばならぬ。

阿弥陀經に就いての祖聖の領解も、亦、化身土の卷に、第二十願の名、至心廻向之願をかゝげてその下に、「不定聚之機 難思往生 阿弥陀經之意なり」と註し、觀經意を述べた後に、「定の専心あり、復、散の専心あり、復、定散の難心あり、大小、凡聖、一切の善惡、各々助正聞難の心を以つて、名号を称念す。…罪福を信する心を以つて、本願力を願求す。」と述

べ、「釈迦牟尼仏、功德藏を開演して、十方濁世を勸化したまう。」と領解して居られる。その意は、定散自力の諸行を修して浄土往生を願う衆生を、諸罪皆消滅する善本徳本の念仏に転入させる大悲をあかさされる。その行は眞実であるが、修する心根は自力で、己が計いで罪福を求め、法を取捨し希願する。この自力の執心を捨て、第十八願の眞実の心行に帰入するのである。

たゞし、念仏者の心理的転入過程を自意識の上に見るならば、浄土願生者は自らは皆眞実信心の念仏者だ、正定聚の機であると最初は感じて居るに相違ない。その機が十九、二十の願に立つて居ることを知らしめらるゝのは、第十七願成就の眞実（至心）に照らされて、邪定、不定の境にある自らの心根を知るからである。かくて、要門から眞門へ、眞門から弘願の門へと転入する。有縁の眞の善智識なくば第十七願成就の鏡なく、この鏡なければこの転入も不可能であり、さらにこの鏡の眞偽を知るものは、その所讚の徳の住正定聚必至滅度なる実存を知ることを知る唯仏与仏の智見である。この智見が凡夫に通ずる道が第十八願成就のところにある。従つて、眞宗の僧伽には、三つのクラスがあり得る。名実共に高貴なクラスは諸行学修の要門、その下が善本徳本の念仏を行ずる眞門、最低のクラスが落第生の弘願門と云つてよからう。最低の境に達してはじめて大悲の願心を了知する。即ち他力廻向の南無が正受されるであらう。

## 第二節 大無量壽經の僧伽觀

大無量壽經には一心、三重の僧伽が現われて居る。第一は能説の釈迦と聞法の阿難、弥勒、万二千の大比丘衆、普賢等の大乘の菩薩と、諸々の縁覺と、それに加うるに、此の經の經家と末代の聞法者である。第二は、説法の内容に現われる世自在王仏と法藏比丘と、法藏一人に代表される一切の還相げんそうの菩薩である。第三は、法藏の願行の果成の阿弥陀仏の浄土の備仏と諸々の往生人の僧伽である。この三種の僧伽の中で、僧伽の理念として、常に吾々が明らかに体解して行かねばならないのは、第三であり、これこそ大經に源を持つ僧伽の規範であり、大經に仏道の生を享くるもの、社会觀の基本である。

此の経の下巻の初頭に「其れ衆生ありて彼の國に生ずる者は」とあるのは、この弥陀の僧伽の中核たる第一類である。未だ成仏して居ないが、完成して居ないが、已に正定の行業を身証し、無上涅槃に到達すること必定なる行証の不變不易不斷の方向を休得した、未完成の完成者たる所化である。それは決して行者自らの分別に依つて定まるのではなく、仏願に基づくことである。正定衆の分限の内面構造を此の経は次に明かして、「其の名号を聞いて、信心歡喜し、乃至一念せむ者」往生を願うその時に往生を得て、不退の位に住すると、釈尊は説く。行者の自意識にあることは、十方世界の無量の諸仏如来が無量寿仏の威神功德不可思議なるを讚嘆する南無阿彌陀仏と云う徳名を聞いて、己が身の歸依仏の不純なるを知らされると同時に、本願の源なる南無に共感（信心歡喜）し、同証せしめらるゝばかりである。一念南無のところに、眞実歸依を至心廻向し給うた弥陀と、讚嘆し伝統する諸仏と、聞信歡喜願生する衆生との間に、血のつながりを休解する。助かるまじき身を助け給う大悲の願行成就の感覺に結ばれる僧伽が創生する。即ち南無阿彌陀仏に生きる自由人の僧伽である。

第二類は、未だ第一類の外にあり、或は自らは内にありと意識しながらも、実はその外にあつて、往生を自計願求する聞法求道の行者のクラスである。現実の人生修行には、歴史的にも社会的にも自然的にも、宿世の背景や環境があつて、身心と不可分の業縁となり、各々に個性的な境遇的な思想的偏執も精神的感覺的な差別も、生活慣習の頑癖もある。三輩段に述べられた所はその類型的概説ではなからうか。

その第一種は、「家を捨てて欲を棄て、行じて沙門となり、一向に専ら無量寿仏を念じ、諸々の功德を修め、弥陀の淨土に願生」するもの。第二種は、出家して修行しないが、無上菩提の心を發し、大いに功德を修め、一向に専ら弥陀を念じて、塔像を起て、戒を持ち、供養禮拜を勤め、淨土に生れんと願う者。第三種は、持戒もかなわず、供養等の功德を修することも出来ないが、「無上菩提の心を發して、一向に意を専らにして、常に念仏して、淨土に生れんと願ひ、深法を聞いて信心歡喜し、乃至一念も至誠心を以つて、淨土に生れんと念ずる」者である。この三種の行者は、自ら菩提心を發して念仏する人であるから、これを第十九の願に配して、三經往生文類にも、「他力の中の自力を宗致としたまえり」と祖聖は解せられた。

これら三種は概観的類型であつて現実の個々の求道者は、この中の何れにも局分されもしないが、大抵は不知不識こゝに一  
時安住するのである。通じて云えば、他力を聞きつゝ自力願生する、我執を越えない境涯の行者である。本願を未だ真に信じ  
しない憾はあるが、本願を尊敬し執持する貴ぶべき求道者である。だから第一類は第二類をもやがて抱擁するが、第二類は自  
ら、硬く隔てゝ知らない。

第三類は、第二類が自力の菩提心の修行の成就し難いことに目覚め、専ら弥陀を念じ、名号を称えて、往生を願うけれど  
も、「尊号を己が善根として」不可思議の仏智本願の真義を信受せず、「五百歳の間、自在なること能はず、三宝を見奉らず  
」、自ら識らずして自計（じけい）につながれて、法を固定し、概念化し、手段化して居る。その自力の機が照破されて、第一類に帰入  
するに比して、これはもつと心幼ない己を知らぬ善意のクラスであつて、恵まれた環境と自身との別を知らない。第一類は第  
三類も第二類も束ねて抱擁するが、第三類は自ら距てゝ容易に第一類に転じない。

このクラス類型の外に、別に他方仏囀の僧伽があつて、その諸々の菩薩衆も弥陀の浄土に往詣して、聞法供養弘法すると經  
に説かれて居る。即ち、第二類第三類の機には、おそらくは聖道門の行者も、諸道諸教の人々をも包含し、儒教の士君子も、  
キリスト教やバラモン教の人々も、皆排除し疎外しない弥陀の僧伽の開放された性格を意味するであろう。

最後に、「経道滅尽の当來の世に、衆生あつて此の經に値い奉るもの」と呼ばれる末法五濁の衆生がある。これこそ十方衆  
生の最底辺であつて、第一類の僧伽の基底である。

こゝ迄、大經の僧伽の規模に就いて概観したが、こゝでその成員たる願生者の資格の内面的構造を知らねばならない。それ  
はとりもなおさず、大經に於ける人間自覺の構造であり、真宗の人間觀であり、教法と衆生の機との関連の問題である。

この問題に就いて親鸞聖人を語ろうとすれば、七祖の解釈にさかのぼつて考えねばならないことは勿論だが、そのことは後  
述べるので、此処では直接大經に就いて通観する。

大經に現れた人間の種類を枚举するなら、仏と菩薩等の仏弟子と衆生と浄土往生人と世間人民と願生浄土者である。この中

で、この経が開発し、達成しようとする目的は、「住正定聚必至滅度の人」であり、「得三大利一則具三足無上功德」と説かれる真の仏弟子である。住正定聚必至滅度の徳はどうして得られるかと云えば、浄土に生るゝ者には、諸々の邪聚及び不定聚の輩は居ないと、第十一願成就に説く。住正定聚必至滅度の菩薩として、衆生に仏道を成就せしめる徳の世界が浄土であるから、菩薩の修行を内外の諸々の障碍なく育くむ世界であろう。従つて、土とは云うが実は人間関係の世界、人間的実践的性格の世界でなければならぬ。成仏のために無障無碍を保証する人間的実践的世界は僧伽である。浄土即ち如来と往生人の僧伽であると云つて過はなからう。

如何にして衆生が浄土に往生することが出来るか。浄土に往生するとは如何なることか。此の事に就いての様々の領解が浄土教史を織り成したと云つてよからう。七祖の御苦勞もこゝにあり、祖聖親鸞が宗教史上、仏教史上に於けるその劃期的地位の由来する所もこゝにあるであらう。存覚の六要鈔が明言するやうに、浄土の本国は弥陀の四十八願である。本願は久遠の法性法身が「設我得仏：不取正覚」と従果向因して、衆生成仏の爲めに、国土を莊嚴する超世の願行を選択し撰取した。だから国土は僧伽であり、莊嚴仏国の清浄之行とは大悲の心行である。そこで、曾我先生の云はれるやうに、四十八願は浄土の存立の基本としての憲法である。

その中から、弥陀の僧伽に帰入するものゝ資格をあきらかにした条章を探せば、「十方衆生」と呼びかけ、「欲生我国」と願を直ちに吾等にかけた条章が三ヶ条ある。第十八と第十九と第二十である。その中で第十八願が基本である。弥陀の僧伽の本質は光明の破闇と寿命の与樂の無限の清浄行である。その僧伽に入る者は住正定聚必至滅度の徳を具する。その眞実の境に衆生を撰取して捨てない尽十方無碍光如来の威神功德不可思議なるに共感同証する諸仏の称揚に名号を聞いて、助かるまじき身に、たのませて、たのまれ給う南無阿弥陀仏の悲願に乗ずる一念に、衆生が往生人の僧伽に入る。但し、如来の本願のこの条章は概念規定でもなければ、個々の行爲の裁断でもなく、常に凡夫の現実を照破する大悲の招喚であつて、凡夫の自覚たる信の一念を喚起し、真人の心行を開発する。称三仏名号の一念に若不生者と願じ、願生彼國者即得往生、住不退転と保証す

る。成就の文に於ける釈迦の保証は、この経の創説者、「名も無き人」、経家の原始の南無の保証である。だから「御助け治定」を離れて往生はない、往生を離れて御助け治定もない。けれども、宿業の凡夫の信にあつては、浄土の徳、弥陀の僧伽の莊嚴に、わが身の現実には常に照らされて、愈々現実の全内容を引き受けて、身の虚仮不実を知らされる。だから、願生者は常に弥陀の僧伽と現実の僧伽との間を往来し、回転しつゝ進む。その回轉の主軸は南無の仏道感覺である。浄土は聞法信喜の衆生、願生者の僧伽を離れて、別個に超越的に在る世界ではない。本願を聞信しないもの、仏道感覺の無いところには、浄土も穢土もない。現実を知れば知る程、如来の僧伽は此処を去ること遠い。相去ること遠きを感じずれば感ずる程、現実には浄土に深く包まれてある。最も近くして最も遠いのが浄土と穢土である。決して同一体ではない。けれども、別の存在ではない。その本は如来の本願にあり、その現実存たる休は願生者である。現実の僧伽が如何に重大な意味を持つかを、事あらためて九思せねばならぬ。

さて、十方無量の諸仏の讚嘆する名号がどうして衆生に聞えるであろうか。諸仏の咨嗟稱嘆が衆生の魂に聞えるには、單に物理的な音響ではなく、仏の願行の徳が諸仏称名に依つて、衆生の心底に徹しなければならぬ。

幼児の手足の發育を見て慈心する故に、父母も祖父母も吾を忘れて、幼児に先立つて匍匐もし、歩行もする。無願惡の人、阿闍世がその罪に醒めんとするとき、その師父さきんじて慚愧すると軌を同じくする。

法藏比丘は世自在王仏のみもとに長跪合掌して、

光顔巍巍々々、威神無極……如来容顔、超世無倫

正覺大音、響流十方……威徳無侶、殊勝希有

深諦善念、諸仏法海……無明欲怒、世尊永無

幸仏信明、是我眞証、發願於彼、力精所欲

十方世尊、智慧無碍、常令此尊、知我心行上

假令トモイ 身止ワッ 諸苦シヨ 毒中ノニ 我行ガ 精進シテ 忍終シヤク 不悔レハ

と讚頌して居るが、これこそ原始の正信念仏偈でなからうか。聞法に於いて誕生した従果向因の求道者法蔵が、「十方世尊智悲無碍 常令此尊 知我心行」と念ずる所に、十方衆生の奥底に諸仏を拝する悲智を感じないものがあるか。「諸苦毒中 我行精進 忍終不悔」と発願せられた永劫修行を招喚の大悲に感ずる。そこに唯「南無」の声を聞く。選択撰取された莊嚴スル 仏園ヲ 清淨之行がこゝにある。

「大千震動し、妙華雨降り、大願満足して誠諦にして虚しからざる」願成就の所以は南無の眞実にある。「三宝を恭敬し、師長に奉事し、大莊嚴を以つて、衆々の行を具足し、諸々の衆生をして功德を成就せしめる」ことゝなつた所以は南無の眞実にある。大経の仏道のキーポイントは、穢惡罪濁を清淨に転成する大莊嚴にあり、それが畢竟依たる南無の眞実にある。

誠に驕慢邪見なること頑石の如き人間の心も、慈雨香風には感ぜざるを得ない。猛進して考えることを知らないハイテイーンも、人の涙には負けると同じである。秋の田に稔る稲穂に「南無」の声を聞き得ぬ人間があるか。常に、何処でも、際限なく、招喚の純粹帰依に聴く南無阿彌陀仏がこの経の生命であり、血である。阿彌陀仏は原始の南無の形容詞である。この血、この感覚は、仏と衆生につながる血である。夫来現の仏、仏と仏と相念ずる血である。だから、其の名号を聞いて衆生が眞人の血に目覚めるのである。

吾々は僧伽の成員の基本条章である衆生の自覚の内面的構造を尋ねて、眞実帰依の称名の相承に到達した。この血、この感覚こそ大無量寿経の僧伽の第一義諦でなければならない。

さて、その僧伽の中の成員と成員との関連、先に行くものと後に随う者との関連は、實際は縦横無尽に、複合的に織り成されて居るであろうが、この経には如何に説かれて居るであろうか。四十八願の中から因中の菩薩のことに就いての願事を抜き出して見る。

## 一、供養諸仏の自在



二、供具如意

三、説一切智

四、得那羅延身

五、知見道場樹

六、得弁才智

等が願われて居る。その内容を収約すれば、十方諸仏善知識を供養恭敬すること自在ならんこと、有縁の同朋を開化養育すること自在ならんこと、開化供養修行の道場を能く窺知して、看過することなからんこと、仏事を行ずる身の健勝ならんこと等である。この様な自由が眞の仏弟子に願われており、南無に於いて保証せられて居るのである。

さらに、十方無量の諸仏世界の衆生で弥陀の名号を聞く者に就いての願事を尋ねて見れば、

一、觸光柔軟身

二、得忍

三、女人成仏

四、常修梵行

五、人天致敬

等がある。その内容は、供養聞法修行に堪える心身の徳を得ると共に、恭敬を受け開化することの出来る徳が具わると云うことである。また、下巻の衆生往生の果徳を見れば、こゝにも往詣恭敬供養と説法開化と受供受敬の自在が説かれ、最後に、悲化段に勧誡せられる所に之を求めると、「聞思勤精進」を勧めて、「当相敬愛無相憎嫉」と「有無相通無得貪惜」と「言色常相莫相違戾」の誠を垂れられた。

かくて明らかかなことは、弥陀の僧伽の構造組織は、行者相互の恭敬供養と開化相扶と修行眞実の複合無尽の相互関連たる常

和の協同体であることである。

大経の僧伽の理念は、眞実帰依の念仏を基盤とする、個々人の常恒の修行の眞実と供養開化の自在の複合無尽の固定することのない関連であることが明瞭となつた。(つゞく)

## 新刊紹介

### 『武蔵町史』

『和名抄』に「国崎郡武蔵郷」とあるように、武蔵という町名はかなり古い。また昭和三十四年には町内の内田で弥生式文化時代の遺跡も発見されているから、この町に住む人びとの歴史は、きわめて古いということが出来る。しかしこれまで武蔵町に関するまとまつた史書がなかつたために、わたしたちは『国東半島史』や『太宰管内志』などによつて、断片的な歴史しか、うかがい知ることができなかつたところが幸いにも、昨年八月に『武蔵町史』が公刊され、そのうらみを除いてくれたことは、地方史研究家にとつて、まことに嬉しいことである。

同書は、郷土の地理(三八頁)、古代史(三二頁)、中世史(三二頁)、近世史(二二六頁)、現代史(六〇頁)の通史と、社寺(九四

頁)、行政(二四頁)、教育・民芸(八〇頁)、人物(一六頁)の部門篇とから成つており、五〇二頁という大著である。史料の多い近世や現代に頁が多きかかれていゝのは当然のことながら、社寺篇がかなりの頁数をとつていゝるのは、さすがにク仏教文化のふるさとクの感を深くさせられる。

筆者は、元国東高等学校長の台宣雄氏や元武蔵中学校長で詩人の瀧口武士氏を始めとして、同町在住の地方史研究家十名で、六か年という歳月を費して資料の採集・研究、執筆にあつた。この間、一昨年の中豪雨の大被害によつて一頓挫をきたしたが、町当局や町民の物心両方面にわたる熱心な援助によつて、この難局を切り抜けて上梓されたと聞く。この快挙は、地方史研究発展のため、まことに喜ばしいことである。

(発行者 武蔵町教育委員会、頒価八百五十円)